

インパール作戦において牟田口廉也が
インド進攻を主張し続けた要因
—ヒューリスティックとバイアスによる分析—

合田 英二

インパール作戦において牟田口廉也が インド進攻を主張し続けた要因

— ヒューリスティックとバイアスによる分析 —

合田 英二

はじめに

インパール作戦は、太平洋戦争の最終段階において陸軍が実施した攻勢作戦である。この作戦は、甚大な犠牲、後方支援等の処置が不十分な状況で作戦を開始した合理性を欠く作戦、作戦参加師団長3名の解任等、古今まれに見る失敗した作戦の代表例として知られている。この作戦は、決定前から陸軍内の多くの人から成功が危惧されていた。しかし、この成功を信じて作戦の実施を積極的に主張し、これを実現させた中心人物は作戦を担当した第15軍司令官の牟田口廉也中将である。インパール作戦を実施することが決定された後においても、牟田口はインパールから更に奥地に入り込む宿願であるインド進攻の実現を目指していた。そのため、牟田口は軍主力の進行方向を上級部隊が命ずるインパール南部からではなく、大部隊の行動がより困難な東部から指向した。その結果、インパール作戦はより困難な作戦となり、甚大な損害を出した歴史上稀に見る大敗北となった。

このようなインパール作戦の決定から終結までの一連の結果から、牟田口は、「愚将」等と徹底的に酷評されている。一方で、牟田口はインパール作戦に参加する以前から主要な作戦等に関与し、軍内外から高い評価を受けていた。昭和12年に発生した盧溝橋事件においては、当事者として日中戦争の端緒を開いたと言われるが、その対応は当時の状況¹を踏まえ、事態をこれ以上悪化さ

せないよう冷静かつ的確に対応している²。また、牟田口は第18師団長として、太平洋戦争初頭のマレー作戦に参加した。特に、マレー作戦の終盤であるシンガポール攻略戦においては、その作戦の天王山と言われるブキテマ高地を攻略してその勝利に貢献し、軍司令官より感状を授与されている。牟田口は、当時の新聞において「戦史に不滅の偉勲³」とその功績を賞賛されるとともに、部下兵士たちは「おれは牟田口の部下だ」と誇りをもって戦っていた⁴。

インパール作戦に関する先行研究は多くある。それらは大きく分けて、インパール作戦が何故実施されたか、もしくは何故負けたかといった要因を明らかにするもの、及び同作戦に関する事実関係を明らかにしたものに分類できる。その中でも、作戦が実施された要因に関する研究は、主に日本軍、日本陸軍等の組織に焦点を当てている。牟田口個人に関しては、組織を対象とした研究に併せ言及されている⁵。一方、牟田口に焦点を当てた研究は少ないが存在する。例えば、広中一成は牟田口を「愚将」とするものの、牟田口が愚将となったのは牟田口日本人の問題ではなく、日本軍が人事管理を能力に応じたものではなく、人間関係によって行ったことが問題であるとしている⁶。また、田中久実牟田口の統率に焦点を当て、牟田口が全師団長を解任するに至った要因を師団長に対するパワー（影響力）の視点から考察している⁷。

多くの人が否定的に捉えていた勝つ見込みの少ないインパール作戦が実行された要因については、既に述べたように組織に焦点を当てた研究において考察されている。それらの中で、インパール作戦実現の中核となった牟田口がインドへの進攻を主張した要因も併せて言及されているが、周囲の反対があったにもかかわらず、合理性に欠けるインドへの侵攻を主張し続けた要因について言及する先行研究は『戦史叢書 インパール作戦』のみである。

戦争において心理学的要素が指揮官の判断に及ぼす影響を研究したものとして、ロバート・ポイス（Robert Pois）とフィリップ・ランガー（Philip Langer）によるものがある。ポイスとランガーは、フリードリヒ2世（Frederick II）やナポレオン（Napoleon）等の歴史上の著名人物が敗れた戦いにおいて、その時の指揮を誤った要因に関して心理学的要素で説明している⁸。

本稿は、牟田口がインドへの進攻を主張し続けた要因をさらに深めるものである。すなわち、牟田口によるインドへの進攻の主張に対し、大本营、南方軍、ビルマ方面軍、隷下師団ばかりでなく、自らの部下からも反対が出たが、それにもかかわらず、牟田口は主張し続けた。先行研究では、その要因は牟田口の信念及び上司への服従を重視する姿勢であるとしている。つまり、前者は牟田口が一度思い込めば、どこまでもやり通す性格であったことが影響したとしている。後者は上級の指揮官であるビルマ方面軍司令官等が牟田口のインドへの進攻について明確に反対しなかったことがその要因であるとしている⁹。果たして、数々の作戦で実績を残している人物が思い込みや上司から反対がないだけで、合理的に明らかに困難とみられる作戦を主張し続けられるのか。

本稿では、牟田口が何故インドへの進攻を主張し続けたのか、その要因について認知心理学の理論を適用して考察する。その中でも、ノーベル経済学賞を受賞したカーネマン（Daniel Kahneman）及びトヴェルスキー（Amos Tversky）により提起され今日まで発展してきた「ヒューリスティック」と「バイアス」の理論を使用する。

1. 分析枠組み

（1）ヒューリスティックとバイアス

人間は日々、多くの事に対して意思決定をしている。意思決定をする際、人間は合理的な意思決定を志向するものの、意思決定に必要な情報を全て持ち合わせていないばかりでなく、時間や能力等にも限界があるため、最適な意思決定が必ずしも為されない。こうした不十分な状況において意思決定をするため、人間はヒューリスティックを用いる。ヒューリスティックとは、可能性を評価したり、価値を予測するといった複雑な課題を、より簡潔に判断できるようにする仕組みである¹⁰。すなわち、人間が意思決定をする際、無限に時間がなく、能力等にも限界があるため、全ての要素を完全に考慮せずに用いる簡潔な解決

や法則がヒューリスティックである。また、バイアスとは、ヒューリスティック等によって生ずる認識の偏りや歪みである。

ヒューリスティックとバイアスには複数の種類があるが、本稿では利用可能性ヒューリスティックに由来する想起容易性バイアスを使用する。利用可能性ヒューリスティックとは、ある出来事について、その発生頻度や確率や原因を推定するとき、人はその出来事が発生した実例が自分の記憶からどれだけ容易に利用可能であるかで判断することである。鮮明に思い出され、心に描くのが容易で明瞭な出来事は、全く感情を喚起せず、平凡で、心に描きにくい出来事よりも利用可能性が高い。つまり、利用可能性ヒューリスティックに由来する想起容易性バイアスとは、人にとっては鮮明で新しい出来事ほど思い出しやすいので、それらは思い出しにくい出来事よりも発生しやすいと誤って判断してしまうことを意味する¹¹。

例えば、カーネマンとトヴェルスキーはこのバイアスの存在を次のような実験結果から示している。その実験では、参加者を二つのグループに分けて、それぞれに男女の有名人の名前が書かれたリストが読み上げられる。それぞれに書かれているリストの中身は異なっており、一方のリストでは数の上では男性の名前の方が多く含まれているが、知名度の方では女性の方が男性を上回っていた。他方のリストでは反対に、数の上では女性の名前の方が多いが、知名度の点では男性の方が女性よりも上回っていた。名前が読まれた後、それぞれのグループの参加者は読まれたリストの中でどちらの性別が多かったかと尋ねられた。その結果、どちらのグループともに、より多くの有名人が含まれていた性別が多いと答えた。参加者は印象深く馴染みのある名前に対してより多くの注意を向けており、そのために誤った判断をしたのであった¹²。

同様の傾向を示すものとして、自然災害に遭遇した人はそうでない人に比べ、被害を補償する保険に加入しやすいことを明らかにした研究がある。例えば、パーム（Risa Palm）は地震が一度発生すると、その地域では新たな地震が発生するリスクが減少するにもかかわらず、地震を経験した人はその直後に地震保険に加入しようとすることを明らかにした。その要因は、地震を経験した人は心

の中で地震のリスクが鮮明かつ強烈に思い出されるようになったからである¹³。

これらの実験から分かることは、「想起容易さ」の根拠となるものは「よく目にする」事例、「よく知っている」事例、「簡単に想像できる」事例や「鮮明な」事例なのである。特に、個人的な経験や観察に関する情報は、記憶に顕著に残る¹⁴。

（２）分析手法

本稿では、日本軍によるビルマ占領からインパール作戦開始までの主要な事象を捉え、各々の機会において、牟田口が上記ヒューリスティックに由来するバイアスに影響されインドへの進攻を主張し続けたことを明らかにする。具体的には、牟田口がインド侵攻の可能性について判断する際、本来最新の敵情や自軍の状況などを基に為されるべきところ、自身が身近に経験した「簡単に想像でき、鮮明な事例」がそれらの要素以上に大きく判断に影響を与えてしまったということを示す。牟田口は軍司令官としてインド侵攻を主張する前、師団長として参加した英印軍のウィングートによるビルマ進攻への対処、マレー作戦及びビルマ攻略作戦に大きく衝撃を受けている。後に説明するように、これらの作戦等で経験した地形、兵站及び敵に関する認識が、インド侵攻の可能性を判断する際に影響した。

分析の手順として二つの段階を踏むことにより、拙論の実証性を高めていく。一つは、想起容易性バイアスを示す主観的及び客観的証拠を積み上げる。牟田口にとっての「簡単に想像でき、鮮明な事例」である上述の三つの作戦等の経験がインドへの侵攻を主張する要因となったことを説明する。この説明では、牟田口自身や周囲の人物の言葉である主観的要素ばかりでなく、主観的要素を裏付ける客観的要素となる作戦の具体的な状況も併せ述べることにより、実証性の向上を追求する。

そして、二つ目は利用可能性ヒューリスティックに基づくバイアスにかかりやすい条件を牟田口に当てはめる。ヒューリスティックに基づくバイアスの理

論で問題となるのは、同一条件下で全ての人がバイアスに影響を受けるとは限らないことである。そこで、カーネマンが明らかにしている利用可能性ヒューリスティックに基づくバイアスにかかりやすい条件を牟田口に当てはめ、牟田口がそのバイアスに影響を受けたことを明らかにする。

2. 牟田口を焦点としたインパール作戦決定までの経緯

太平洋戦争は真珠湾攻撃の奇襲に始まり、南方各地で日本軍は快進撃を続けた。大本營の南方作戦の指導構想は、極東における英米の重要拠点である香港、マニラ、シンガポールを攻略し、さらに蘭領インドなどの重要資源要域をなるべく広く押さえて、長期戦に堪えうる態勢を確保することであった。そのためには、それら地域の外方に必要な反撃地域の確保が不可欠である。ビルマは、その西の要域として、また援蒋ルート of 遮断として重視すべきとされた¹⁵。

1941年12月8日の太平洋戦争冒頭、第15軍の一部はビルマ攻略に先だち、バンコクをはじめ、タイ南部の主要地域に上陸した。タイ国軍や警備隊による抵抗はあったものの、軽微であり進駐は順調に進んだ。タイ進駐に引き続き、その一部はビルマ南方に進出した。1942年1月、第15軍は主力をもって、ビルマ侵攻を開始、5月末までに敵を一掃してビルマ攻略を完了した。このビルマ攻略の圧勝ともとれる作戦結果は、この作戦に参加した牟田口をはじめとする将兵の心に深く刻まれることになった¹⁶。

ビルマ攻略は容易になったものの、雨期が明ける秋頃より、連合軍の反攻、特に航空反攻がはじまると予想された。これに基づき、大本營は南方軍に対し、航空作戦に関する研究を指示した。8月、大本營の指示に基づき、南方軍はインド東北部進攻作戦計画等を報告、大本營は南方軍の報告を受け、インド東北部に対する作戦準備を指示した。この作戦は、アッサム州東北部の要域及びチタゴン付近を攻略確保して、航空作戦を容易にするとともに、援蒋ルートの遮断を目的とするものであった。

9月、南方軍は大本營の指示に基づき、インド進攻作戦（21号作戦）準備命令を第15軍に下達した。第15軍司令官の飯田祥二郎中将は、突然の命令に当惑した。飯田は、第15軍の準備命令に関する師団長の腹藏のない意見を聴取するため、当時第18師団長であった牟田口を直接訪ねた。この時、牟田口は「一挙に東部インドに突進しようとするこの案は、後方整備の関係特に兵站道路の構築、補給体系の確立準備などの諸点からみて、あまりにも時間的余裕がなく、実現の見込みはないと思う¹⁷」と回答している。後に、インドへの進攻を主張しつづけた牟田口だが、この時は兵站、つまり後方支援の要因を考慮に入れて、インド進攻に反対していたのである。

その後、21号作戦は第15軍による意見や寺内寿一南方軍総司令官のビルマ視察結果などを受け、無期延期となった。だが、陸軍からインド進攻に対する考えが完全に消えたわけではなかった。その消えかかった灯火を復活させた原動力は、牟田口であった。1943年4月、第15軍司令官に補職された牟田口はビルマ方面軍司令官に着任した河邊に対し、インド進攻に対する希望を申し述べた。この時が牟田口によるインド進攻に関する初めての意思表示であった。

牟田口は第15軍の作戦指導の手始めに、ウィングート旅団掃討後の対策の検討を行った。牟田口は偵察結果に基づき、正面の第1線をビルマ西方のチンドウィン河に推進（武号作戦）することを最良と判断したが、武号作戦について検討していた軍参謀部は結論をまとめ、「武号作戦はこの際実施せざるを可とする」と参謀長の小畑信良少将が牟田口に報告した。牟田口は小畑以下全参謀を集めてその消極的態度を強く難詰し、チンドウィン河に進出するのみならず、アッサム州まで進攻する作戦を披瀝した。小畑には青天の霹靂であった¹⁸。小畑は、この構想をなんとしても思いとどまらせるべく、牟田口の武号作戦実施の判断に影響を及ぼした第18師団長の田中新一中将を訪ね、牟田口が田中の意図を誤解していることを確認し、田中から牟田口にその旨を伝えるよう依頼した。後日、第15軍の兵団長会同後、田中は牟田口を訪ね、第18師団を武号作戦に使用することが困難であることを伝えたが、牟田口は司令官に直接意見をすべき参謀長が隷下師団長を通じて意見を言わせた小畑を問題視し

て更迭した。

インド進攻に対する牟田口の思いは、日々高まった。機会ある毎に、方面軍司令官や南方軍総司令官をはじめ、その参謀や大本營の派遣参謀に対し、その構想を説明した。牟田口の構想に対し、河邊はその意向を尊重した。しかし、南方軍やビルマ方面軍の一部の参謀は明確に反対した¹⁹。

5月、河邊は南方軍総参謀副長の稲田正純少将を訪ね、「チンドウィン河西岸アラカン山系への防衛戦の推進」に関する方面軍の考えを述べたところ、稲田は方面軍で兵棋演習を実施するよう申し入れた。6月、ラングーンの方面軍司令部で兵棋演習が実施された。演習の結果、ビルマ西方のミンタミ山系内の要域に防衛線を設定しても、英印軍の反撃は必至であり、それならば、むしろ当初からインパール平地における敵の策源地を目的に自主的に進攻すべきとなった。この積極的な結論は、アッサム地方に進出する構想を準備していた第15軍、特に牟田口にとって望ましい方向であったが、十分ではなかった。南方軍から視察に来ていた稲田は演習後、「補給を軽視する第15軍の作戦構想には危険性が多い」と述べ、構想の再考を促した²⁰。

以後、第15軍、ビルマ方面軍、南方軍は各々、インパール作戦に関する研究を深めていった。第15軍司令部においては、参謀間で積極・消極の両意見が出た。前者はインパール平地攻略後、更にディマプール平地、ブラマプトラ河の線に地歩を拡大するもので、後者はインパール周辺のアラカン山の要域攻略をもって中止し、活発な謀略戦等を展開するものである。しかし、彼らにとって牟田口の結論は火を見るより明らかであった。ラングーンでの兵棋演習の結論を反映するならば、第15軍が主張してきたアッサム地方に進出する「鶴越え作戦」を修正しなければならないが、第15軍ではそのことは問題とならなかった²¹。

インパール作戦を実施する上で大きな問題となったのは、兵站、その中でも補給や輸送をいかに実施するかということであった。第15軍はインパール作戦のために必要な相当の兵站諸部隊の配属を要望したが、結果として内示された部隊数は要望数の約2割程度であった。第15軍参謀部はこの結果から作戦が

至難と感じたが、牟田口はなんら焦慮の色なく作戦準備に邁進した²²。

問題を抱えていたインパール作戦であるが、稲田による大本営への説明などにより、その実現に向けて一步を踏み出し始めた。8月、大本営は南方軍に対し、インパール作戦（「ウ」号作戦）準備指示を発出した。それに基づき、南方軍、そしてビルマ方面軍はそれぞれ作戦準備命令を下達した。両方の命令に共通しているのは「軍の重点をチンドウィン河西方地区に保持しつつ一般方向をインパールに指向」としていることであり、牟田口が考える「軍の重点を北方に保持し、戦機を捉えてコヒマからディマプールに突進」を否定していた。しかし、牟田口には通用しなかった。方面軍の作戦準備命令を受領した牟田口は勇躍、従来から自分が考えていた作戦構想どおりの作戦準備に全力を傾注した²³。

8月下旬、第15軍は隷下部隊に対し、作戦構想の徹底を図り、作戦準備を命ずるため、各兵団長及び参謀を集め兵棋演習を実施した。第18師団長の田中は軍の後方参謀である薄井誠三郎少佐に対し、後方支援の実現可能性について質問し、薄井は責任を持ってないと正直に回答した。田中は憤然として薄井を強く難詰し、席上は気まずい雰囲気となった。その時、牟田口は「もともと本作戦は普通一般の考え方では、初めから成立しない作戦である。糧は敵によることが本旨である。各兵団はその覚悟で戦闘せねばならぬ」と戒めた。列席の各兵団長は内心、牟田口の本心を疑った²⁴。

9月、南方軍は各軍参謀長会同を開催した。出席した第15軍参謀長の久野村桃代少将は、南方軍総参謀副長の稲田に対し、インパール作戦構想の承認を求めた。その内容は旧態依然の構想で、6月のラングーン兵棋演習の時に再検討を要求したことは全く反映されていなかったことから、稲田は第15軍の構想を認めなかった。つまり、この時点では、第15軍の構想は南方軍には承認を得られず、このままでは牟田口の構想どおりには作戦は実施できない。しかし、この結果を受けても、牟田口は自身の主張するインド進攻構想を捨てなかった。

10月、牟田口のインド進攻を実現する上で、幸運が訪れた。それは、これまで牟田口の構想を反対し続けた稲田が突如転出することであつた。稲田は転出に際し、総司令官の寺内に対し、第15軍の考えるインパール作戦構想には

問題があることから、承認には慎重を要すると進言するとともに、参謀に対し、第15軍が構想を修正しない限り認可しないよう指示した²⁵。

一方で、大本営は8月にウ号作戦準備を指示してはいたものの、その内部ではインパール作戦構想に危惧を覚える人物がいた。その一人は東條英機陸相である。稲田の後任として着任した綾部橘樹少将は、東京を出発する時、東條から「インパール作戦決行の可否については着任後十分研究するように²⁶」指示されていた。また、参謀本部第1部長の眞田穰一郎少将は、「インパール作戦は実行すべきではない²⁷」と考えていた。

しかし、大本営とは異なり、南方軍やビルマ方面軍では稲田の転出などにより、ウ号作戦の実現には追い風が吹きつつあった。だが、それでも牟田口が修正しないインド進攻構想には依然として大きな懸念を抱いていた²⁸。

以上の状況から、大本営ばかりでなく南方軍やビルマ方面軍にあっても、ウ号作戦を行う最終決心をするには至らなかった。こうした中、12月、第15軍司令部で兵棋演習が行われることとなった。南方軍にとって、この兵棋演習はその内容次第で、最終的なウ号作戦実施を決意する重大な位置づけを有するものであった。この演習において、作戦構想はこれまで第15軍が主張してきたとおりに進められた。演習を視察した南方軍総参謀副長の綾部は、牟田口をはじめとする第15軍の攻勢意欲等を考慮して作戦認可に傾いていた²⁹。その後、南方軍はインパール作戦を上申し、大本営は認可することとなった。

3. インドへの侵攻を主張し続けた要因

(1) 利用可能性ヒューリスティックに基づく想起容易性バイアスの証拠

ア. 地形に関する判断

1943年3月、第15軍司令官に補職された後に牟田口がインド侵攻に対する考え方を変えたことに関して、一連の経緯を知るものには不可解に映っている。

た³⁰。牟田口は、それでは何故、師団長時代に否定的に捉えていたインド進攻に対する考えを軍司令官時代に変えたのか。その要因は、英印軍のウィングート兵団によるビルマ侵入に端を発した。牟田口は「第15軍は本作戦（ウィングート兵団掃討作戦）の結果、地形の認識に重大なる過失をおかしているのを認めた。即ち当該地区の密林は乾季至る所部隊行動の自由のみならず、チンドウィン河も乾季筏等、現地渡河応用材料を以て容易に渡河し得る事である³¹」と述べている。

この前後の時期の発言の関係には、理解が難しい点がある。師団長時代は、インド進攻作戦が輸送、補給といった後方支援全般の観点から主張している一方、軍司令官時代の主張では、地形、すなわち部隊移動の観点に論点が変化していることである。もちろん、部隊移動ができることは、輸送ができることに関係はする。だが、後者では補給に関しては言及がないのである。このように牟田口の考えには一貫性がなかった。

終始一貫した考え方に基づく合理的理由からの判断変更でないならば、何が牟田口の判断に影響を及ぼしたのか。戦後、インパール作戦に関する座談会において、牟田口は「(昭和) 18年に入ってきたんです、ウィングートが。それまで地形というものは一面森林であって、大兵団の作戦に適さないという観測をわたしは下しておった。それで、(ビルマの) 防衛も曲がりなりにもできると思っておりましたが、ウィングートが入ってまいりまして、一面の樹海が、一つの障害として利用するに足りなかったということが分かりました。ビルマ防衛を完全にするためには、むしろ向こうがこちらへ出撃する前に、進んで叩いた方がよろしいという意見具申を（ビルマ方面軍司令官の河邊正三中将に対し）(括弧内筆者) したんです³²」と、ウィングート兵団によるビルマ侵入が衝撃的であったと述べている。また、自身の回想録においても、「ウィングートの進入によって私の先入主感的判断の誤に対して痛棒を喰わされた³³」とも述べている。

この点に関し、牟田口を補佐した第15軍情報参謀の藤原岩市少佐は、「軍司令官はこの掃討作戦で中北ビルマの地勢認識を一変するショックを受けた」と

当時を述懐している³⁴。

これらのことから言えるのは、自分では困難と捉えていたビルマとインド国境を越えた大兵团による作戦を英軍が実施したことが衝撃的であったため、牟田口の記憶から利用可能で、かつ、思い出し易かったものとなった。つまり、利用可能性ヒューリスティックに由来する想起容易性バイアスが働き、インドへの進攻可能性を過大に評価したと考えられる。

イ．兵站（補給・輸送）に関する判断

1943年8月に実施された第15軍の兵棋演習において、各兵团長が牟田口の本心を疑った奇異とも思える発言の背景には、師団長時代に経験したマレー作戦やビルマ攻略作戦の経験が利用可能性ヒューリスティックに由来する想起容易性バイアスとなっている。

既に述べたように、インパール作戦の問題の一つは兵站³⁵であった。牟田口は兵棋演習において、その問題点を敵に求めることで解決することを明らかにしたが、このような発想をしたのはこの時が例外ではなかった。後に牟田口は「インパールを攻略しさえすれば、その後の補給に必要な輸送機関やその他のことはなんとでも都合がつく。インパール付近は英印軍の大補給基地であり、心配することはない³⁶」と述べている。また、「敵が潰走する際、遺棄する兵器、弾薬、糧秣は莫大なのを常とする。従って、補給に就いては憂うるに足らない。敵の装備、携行品、貯蔵品悉く我が補給源だ。軍は之を十二分に胸算して此の度の作戦を敢行する³⁷」とも述べている。

孫子が言う「廟算して戦う前に勝ち目を見いだす³⁸」ように、通常考えることは、自らの方策によって勝ち目を見いだすものである。しかし、牟田口は、敵が過失を犯してくれれば勝てるとしているのである。つまり、敵が負けて、かつ、補給品を処分せず残置してくれることを期待しているのである。インパール作戦までの牟田口の実績を踏まえれば、牟田口がこのような発想は極めて危険であることを当然見抜けるはずであるが、何故、牟田口はこのような発想を否定しないばかりか、堂々と主張したのか。

太平洋戦争が開始された時、牟田口は第18師団長であった。牟田口の指揮する第18師団はマレー作戦に参加した。マレー作戦の経験は、参加した将兵に多大な影響を及ぼした。マレー作戦における兵站上の問題点は如何にして迅速に半島を前進する部隊に補給品を補給し続けるかということであった。しかし、第1線部隊は、戦闘中随所に敵の補給品を鹵獲でき、特に食糧の補給については、作戦の速度が迅速であったのに比べ、とりわけ困難を感じていなかった³⁹。

補給が必要な物品は食糧だけではない。武器や弾薬の補給も継続的な戦闘に不可欠である。マレー作戦では、食糧のみならず、武器も英印軍から多数鹵獲している。牟田口の指揮した第18師団は、マレー作戦で損耗した武器を敵から鹵獲した武器をもっておおむね充足し、その後大きな懸念なく作戦を遂行していった⁴⁰。

事実、インパール作戦間においても、こうしたことは各所で生起している。第31師団の歩兵団長としてインパール作戦に参加した宮崎繁三郎少将は、英印軍から獲得した装備や補給品を積極的に活用した。部隊の進出目標であるコヒマに進撃途中における部隊の補給品の状況について「(弾薬は)猛烈にありました。毎日、機関銃なんかでも、山のように菓莢が積まれておりました。ガソリンなんか、軍が使う1年分くらいあったんです⁴¹」と当時を述懐していた。また、第15師団の第60連隊長としてインパール作戦に参加した松村弘祭大佐は英印軍の補給所から補給品を鹵獲した当時のことを「誠に多種の糧食が豊富に集積してあった。之を我々の携行せる極めて貧弱な給与と比べて余りにも桁外れの優秀さに一驚を喫した次第である。敵の捨てた陣地に遭遇する毎に、大なり小なりこの種の給与にありつくことが出来た⁴²」と述べている。

後方地域にある補給品を部隊が使用するためには、言うまでもなく、それを第1線まで運ぶ輸送手段が必要となる。インパール作戦における兵站上の最大の問題は輸送にあったと言っても過言ではない。牟田口は、この問題について、アイデアを持っていた。それは、馬以外の動物も輸送手段として利用すること⁴³である。牟田口はこの点について、「自ら多く食糧として各師団に牛、山羊、

計一万頭を携行させた⁴⁴」と後年回想している。動物は、輸送手段としてだけでなく食糧にもなるので、正に一石二鳥である。

この発想は、牟田口の独創によるものなのであろうか。実は、この動物を使用した輸送も、補給品の事例と同じく、身近に経験した作戦が影響している。その経験とは、ビルマ攻略作戦である。牟田口は、マレー作戦に引き続きビルマに転戦し、ビルマ攻略作戦に参加した。ビルマ攻略作戦において、第15軍はビルマ国内に展開した第15軍の各部隊に補給するため、部隊装備車両、鹵獲車両や馬では足りず、水牛を活用した。当時の第15軍司令官の飯田は、「(補給機関の不足に対し、)ビルマ人が最も重用している輸送機関、即ち、牛車の利用によって補っていたのである。……ビルマの牛車はビルマの全作戦を通じ、日本軍の為非常に貢献した⁴⁵」と述べている。第15軍の指揮下で作戦に参加した第18師団も水牛を活用していた。資料によれば、馬の10倍以上の水牛を輸送に活用していた⁴⁶。

動物を使用した輸送は日本軍だけのものではなく、英印軍も積極的に使用していた。インドとビルマの国境に存在するアラカン山系は道路網が発達せず急峻な地形のため、車両は十分使用できず両軍ともに輸送が困難であった。こればかりでなく、雨期の豪雨により幹線道路の状態は悪化し、輸送能力を大幅に低下させた⁴⁷。こうした状況において、英印軍も動物を積極的に活用した。既に述べた牟田口がインド進攻構想を発想する原点ともなったウィングート兵団は、アラカン山系を越えてビルマに進攻するにあたって使用した動物は、日本軍が使用した水牛ではなく主にラバであった⁴⁸。雄ロバと雌馬の交配で生まれたラバは、両者の長所を生かし、粗食に耐え強健で持久力があつた。ウィングート兵団は、この動物を使用した輸送と、航空機による空中補給により、ビルマ国内での長期間にわたる戦闘を継続することができた。

牟田口にとって、インドへの進攻を検討する上で至当に評価しなければならぬ兵站に関して、マレー作戦における敵からの補給品の鹵獲経験やビルマ攻略作戦における水牛による輸送経験から、利用可能性ヒューリスティックに由来する想起容易性バイアスが働き、インドへの進攻可能性を過大に評価したと

考えられる。

ウ．敵に関する判断

1943年12月、第15軍が実施した兵棋演習において、作戦構想はこれまで第15軍が主張してきたとおりに進められた。演習終了後、牟田口は「英印軍は中国軍より弱い。果敢な包囲、迂回を行えば必ず退却する。補給を重視し、補給についてとやかく心配することは誤りである。マレー作戦の体験（傍点筆者）に徴しても、果敢な突進こそ戦勝の捷路である。諸官はなんら危惧することなく、ただ目標に向かって突進すれば良い⁴⁹」と述べ、既に述べた補給ばかりでなく、敵である英印軍についても言及している。

敵である英印軍を軽視する牟田口の発言はこの時だけではない。先の8月の兵棋演習においても「敵と遭遇すれば銃口を空に向けて3発射て、そうすれば敵はすぐ投降する約束ができていのだ⁵⁰」と冗談とも取られかねない発言をしている。牟田口が「愚将」だからこのような発言をしたのであろうか。

牟田口の発言は自身でも言及している「マレー作戦」の体験が影響していることが考えられる。既に述べたように牟田口が指揮した第18師団は、マレー作戦に参加した。この作戦は、予想以上に早く、極めて容易にシンガポールまで到達することができた。マレー作戦に参加した部隊の資料を見ればこのことは明らかである⁵¹。

また、敵側の視点からもマレー作戦の様相を伺い知ることができる。英印軍とともに戦った豪軍指揮官のゴードン・ベネット（Gordon Bennett）将軍はこの作戦の様相を「日本軍は800キロを50日、盗んだ自転車に乗った砲兵もない（傍点筆者）日本軍に追いまくられた⁵²」と述べている。この言葉は重要なことを示している。つまり「砲兵もない日本軍」に追いまくられるということは、英印軍は戦闘の体をなしていないことを意味する。通常の戦闘は砲兵による火力支援があればこそ、防御する敵を駆逐できるのである。それでは、英印軍はマレー作戦間、敗走を続けただけなのであろうか。実際、英印軍は諸所抵抗を行っているが、日本軍の巧みな戦術に翻弄された。日本軍が少数の部隊で

も包囲により英印軍の退路を遮断することによって、英印軍は大軍に包囲されたと誤認して後退していったのである⁵³。

こうした体験は、その後のビルマ攻略作戦においても繰り返された。牟田口の指揮する第18師団は、1942年4月中旬から6月中旬までの約2ヶ月の期間にわたり作戦に従事した。この間、前半はビルマ中部の主要都市マンダレー攻略をはじめ7つの戦闘を行うとともに、後半はビルマ東部のシャン州の残敵を掃討した。この作戦はマレー作戦同様、極めて容易に進んだ。そのことを示すものとして、この作戦と他の作戦との戦死傷者数の違いを下記の表で明らかにした。この表を見れば、ビルマ攻略作戦が他の作戦に比し、極めて少ない損害で遂行できたことが分かる。

作戦名（作戦期間）	戦死傷者数
ビルマ攻略作戦（約2ヶ月）	350
南京攻略作戦（約2ヶ月）	1600
広東攻略作戦（約1ヶ月弱）	3500
フーコン作戦（約8ヶ月）	5000

表 第18師団の主要作戦における戦死傷者数⁵⁴

また、ビルマ攻略戦がいかに容易に進んだかを示すものとして、当時、第15軍司令官であった飯田は「敵の兵力がいくらあるか判らないのに、何等の懸念なく之を攻撃し、敵を撃破した後に非常に優勢な敵であったことを始めて知って驚いたのは、支那の戦場で幾度となく経験したところである。ビルマの戦場でも同じ事を繰り返した」と述べている⁵⁵。実際、第1線で戦闘に参加した指揮官も同様のことを述べている⁵⁶。

牟田口は、英印軍に対する評価について直接言及している。ビルマ攻略作戦が終わった半年後、牟田口は部下を前に「英軍は局所の戦闘においては強靱な戦闘をするも、戦術的又は戦略的着意において腑に落ちざること多し⁵⁷」と述べた。また、牟田口は戦後、作家の山岡荘八との対談において、英印軍の印象

が想像していたより弱かったのではないかととの質問に対し、「それは非常に感じました。いまでも、イギリスの方はあまり強いとは思っておりません⁵⁸」と述べている。牟田口にとって、いかに英印軍が弱い存在と映っていたかは、戦後に至るまで一貫してこの考えが鮮明に残っていることから推察できる。

こうした英印軍を軽視する風潮は牟田口だけのものではなく、軍全体に共通することであった。大本営は、ビルマ攻略作戦後に纏めた教訓において、英印軍の素質を極めて低く評価している⁵⁹。また、ビルマ方面軍の後方参謀であった後勝少佐は「緒戦の戦勝に心驕り、とかく彼我戦力の逆転せる現況を無視し、敵を軽視するのはビルマ方面軍の、否、国軍全般の通弊であった⁶⁰」と当時を述懐している。

牟田口にとって、インドへの進攻を検討する上で至当に評価しなければならぬ敵について、マレー作戦やビルマ攻略作戦における作戦が容易に進行したことから、利用可能性ヒューリスティックに由来する想起容易性バイアスが働き、周囲の雰囲気と相まって英印軍を過小評価することに繋がり、インド進攻作戦の成功可能性を過大に評価したと考えられる。

（２）利用可能性ヒューリスティックに基づくバイアスにかかりやすい条件

これまで、日本軍によるビルマ占領からインパール作戦までの経緯に基づき、牟田口が経験したマレー作戦やビルマ攻略作戦等から想起容易性バイアスを示す主観的及び客観的証拠を明らかにした。

次に、利用可能性ヒューリスティックに基づくバイアスにかかりやすい条件を牟田口に当てはめる。カーネマンは次の条件において、人間は利用可能性ヒューリスティックに基づくバイアスにかかりやすいとしている⁶¹。

- ① 努力を要する別のタスクを同時に行っている。
- ② 人生の楽しいエピソードを思い出したばかりで、ご機嫌である。あるいは落ち込んでいる。
- ③ タスクで評価する対象について生半可な知識を持っている。
- ④ 直感を信じる傾向が強い。

⑤ 強大な権力を持っている。

牟田口はこれらの条件に当てはまるのであろうか。まず一点目の別のタスクについては、第15軍司令官に就任してからインパール作戦を実行する1943年4月から1944年3月までの間、インパール作戦を検討する他に、英印軍のウィングート兵団に対する掃討作戦やフーコン作戦を指揮する厳しい状況であった。次に、牟田口のこの時期の心境は、既に述べたように、シンガポール攻略戦などの功績により軍内外から高い評価を受けており、得意絶頂であったと言える。更に三点目の生半可な知識も牟田口に該当する。つまり、インド侵攻作戦を検討するに当たり、牟田口は自分がこれまで戦ってきた敵に関する知識をそのまま当てはめていた。だが、敵である英印軍がそれまでに戦ってきたそのままの敵であれば問題はないが、英印軍も変化している。戦力を増強しているばかりでなく、日本陸軍を研究して、その対策も講じてきている。これまで戦ってきた敵は簡単に撃破できたが、これまでのようにはいかない可能性があるとして、しっかり情報収集をする等、冷静かつ慎重な対応が必要であった。また、藤原少佐が後年、牟田口の性格を評して「驍将の如く見える反面、気の弱い面があり、自意識過剰で思考が単純な嫌いがあった⁶²」と述べたことから、牟田口は四点目の条件に該当していると考えられる。そして最後の条件は、牟田口は軍司令官という軍内ではより高い立場の指揮官であったことから、強大な権力を有していたとも言えよう。

総じて、牟田口はカーネマンが提示した条件に該当していたと考えられることから、牟田口は利用可能性ヒューリスティックによるバイアスにかかりやすかったと言えよう。

おわりに

本稿では、牟田口がインドへの進攻を主張し続けた要因について、先行研究を補完する位置づけで、それを深めることができた。つまり、先行研究では言及されてこなかった「ヒューリスティック」と「バイアス」を用いて、牟田口

がインドへの侵攻を主張し続けた要因を明らかにすることができた。過去の作戦で実績を残している牟田口が周囲の反対にもかかわらずインドへの進攻を主張し続けられたのは、地形、兵站及び敵の観点から利用可能性ヒューリスティックに由来する想起容易性バイアスが作用したからであった。

インパル作戦について理論で分析を試みる取組は多くはなされておらず、まして、心理学の理論を用いられることはなかった。加えて、インパル作戦の研究において、理論を用いることによる含意は重大な意義がある。すなわち、これまでなされてきた「愚将」等の牟田口への否定的評価は、牟田口個人に向けられている。一方で、理論を用いて牟田口の行動を説明することにより、牟田口の行ったことは一般化される。つまり、牟田口ではなくても、牟田口のような経験、立場や性格であれば、誰しも同じことを犯してしまう可能性があるということを示しているのである。更に重要なことは、本稿で取り上げたヒューリスティックによるバイアスはカーネマンも指摘するように、愚かな人間だけがかかりやすいものではなく、カーネマンのような「賢い」人物でも影響を受けるもの⁶³なのである。

よって、本稿が言える含意とは、牟田口がインドへの侵攻を主張し続けたのはその直前に経験したことが利用可能性ヒューリスティックによる想起容易性バイアスとなって影響したことであり、インドへの侵攻を主張し続けたことが牟田口を「愚将」と評価する一因には必ずしも該当しないということである。つまり、牟田口は誰しも陥りやすいバイアスの罠に嵌まってしまったのである。この含意は、これまでの牟田口に対する評価に一石を投ずるものであり、研究の意義は深いものと考ええる。

注

- 1 当時、現地の日本軍民に対する中国軍民の行動は極めて悪化しており、これ以上の状況悪化を避けるためには、現地軍民のみならず陸軍全体としても実力行使が必要であったとの認識が強かった。
例えば、参謀本部作戦課の参謀であった井本熊男大尉は現地を視察後、当時の現地状

況に関して「当時の中国国内の状況は、日本の官民に対し、脅迫、暴行などの事件が頻発していた。・・・現地の日本側官民は、この事態を解決するには実力を行使して一撃を加えること外にないと訴える声が逐次大きくなっていった。・・・そうした対支強硬論は、現地ばかりでなく陸軍のほとんど全部の態度であったと言われる」と回想している。井本熊男『支那事変回想録 支那事変はなぜ起こったか』（防衛研究所戦史研究センター所蔵）、1973年、406～407頁。

- 2 牟田口が上司の支那駐屯歩兵旅団長であった河邊正三少将の意向に反し、中国軍に攻撃を実施したと批判する意見もある。しかし、牟田口自身も述べているように、この事件を起こした事に対し、牟田口は一切処分を受けなかったことから、当然の処置と見なされたのが実態である。牟田口廉也『盧溝橋事件発端の真相に就て』（防衛研究所戦史研究センター所蔵）、1頁。
また、盧溝橋事件からちょうど1年後、新聞では牟田口を「去年けふの立役者」と賞賛するとともに、北京居留民会は事件の舞台となった一文字山に記念碑を建立しているように、部外からも評価を受けている。『読売新聞』1938年7月7日
- 3 『朝日新聞』1942年8月8日。
- 4 『読売報知』1942年8月8日。
- 5 例えば、戸部良一、寺本義也他による『失敗の本質』（中公文庫、1991年）や、荒川憲一「日本の戦争指導におけるビルマ戦線」『平成14年度戦争史研究国際フォーラム報告書』（防衛研究所、2002年）がある。
- 6 広中一成『牟田口廉也』星海社、2018年。
- 7 田中久実「インパール作戦における牟田口軍司令官の統率」（防衛大学校図書館所蔵）、2009年3月。
- 8 Robert Pois and Philip Langer, *COMMAND FAILURE IN WAR* (Indiana University Press, 2004)
- 9 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 インパール作戦』（朝雲新聞社、1968年）、128～130頁。
- 10 Amos Tversky and Daniel Kahneman, “Judgement under Uncertainty: Heuristics and Biases”, *Science*, Vol. 185, No. 4157 (Sep 1974), p.1124.
- 11 M.H.ベイズーマン・D.A.ムーア著、長瀬勝彦訳『行動意思決定論』（白桃書房、2011年）、21～68頁。
- 12 Tversky and Kahneman, “Judgement under Uncertainty: Heuristics and Biases”, p.1127.
- 13 Risa Palm, “Catastrophic earthquake insurance: Patterns of Adoption”, *Economic Geography*, 71 (2), pp.119-131.
- 14 印南一路『すぐれた意思決定』（中央公論社、1997年）、164～170頁。
- 15 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 ビルマ攻略作戦』（朝雲新聞社、1967年）、12～13頁。
- 16 例えば、インパール作戦時にビルマ方面軍の参謀であった後勝は、後年、「緒戦の戦勝に心驕り、と角彼我戦力の逆転せる現況を無視し、敵を軽視するはビルマ方面軍の通弊であった」と回想している。
- 17 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 ビルマ攻略作戦』565頁。
- 18 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 インパール作戦』97頁。
- 19 南方軍総司令部においては総参謀副長の稲田正純少将が、ビルマ方面軍においては高級参謀の片倉衷大佐が各々牟田口の構想を危険視して、その実現阻止に動いていた。しかし、稲田は1943年10月転出、また片倉は河邊司令官が牟田口の構想を支持する決

- 心をしたことにより、それぞれ反対する機会を失った。
- 20 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 インパール作戦』107～110頁。
 - 21 同上、114～115頁。
 - 22 発令数は、内示数より更に減少していた。同上、189～191頁。
 - 23 同上、117～125頁。
 - 24 同上、125～126頁。
 - 25 稲田正純『昭南日記 其の一』(靖国偕行文庫所蔵)、314～315頁。
 - 26 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 インパール作戦』、143頁。
 - 27 同上、144頁。
 - 28 同上、144頁。
 - 29 同上、155頁。
 - 30 片倉衷『インパール作戦秘史』経済往来社、1975年、55頁。
 - 31 牟田口廉也『インパール作戦回想録 その一』(防衛研究所戦史研究センター所蔵)、1956年、57頁。
 - 32 文藝春秋社『インパール作戦 座談会』(防衛研究所戦史研究センター所蔵)、1963年、連番1252～1253頁。
 - 33 牟田口廉也『インパール作戦回想録 その一』17頁。
 - 34 藤原岩市『留魂録』(振学出版、1986年)、192頁。
 - 35 インパール作戦に関する兵站の研究として、美藤による「日本陸軍の兵站思想とその限界」がある。そこでは、日本陸軍の兵站状況に関する分析が詳細になされている。美藤哲平「日本陸軍の兵站思想とその限界」『軍事史学』第51巻第3号(2015年2月)、109～130頁。
 - 36 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 インパール作戦』190頁。
 - 37 松村弘祭『インパール作戦の回顧』(防衛研究所戦史研究センター所蔵)、1954年、45～37頁。
 - 38 孫子、金谷治訳『孫子』(岩波文庫、2000年)、33～34頁。
 - 39 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 マレー進攻作戦』(朝雲新聞社、1966年) 466～467頁。
 - 40 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 ビルマ攻略作戦』336頁。
 - 41 文藝春秋社『インパール作戦 座談会』連番1334～1335頁。
 - 42 松村弘祭『インパール作戦の回顧』45～46頁。
 - 43 戦争における動物の使用に関する研究として、秦による「軍用動物たちの戦争史」がある。そこでは、インパール作戦における軍用動物の使用についても1つの焦点として詳しく述べられている。秦郁彦「軍用動物たちの戦争史」『軍事史学』第51巻第3号(2015年2月、109～130頁。
 - 44 牟田口廉也『インパール作戦回想録 其二』(防衛研究所戦史研究センター所蔵)、1956年、107頁。
 - 45 飯田祥二郎『ビルマ戡定作戦 上巻』(防衛研究所戦史研究センター所蔵)、1957年、連番1941～1942頁。
 - 46 北部の作戦において、輸送力として活用した動物は、駄馬37頭に対し、挽牛494頭であった。第18師団管理部『第18師団管理部隷属輜重 陣中日誌』(防衛研究所戦史研究センター所蔵)、連番2158頁。
 - 47 S.Woodbarn Kirby, *The War against Japan II*, London, Her Majesty's Stationery Office, 1958, p.238.
 - 48 秦郁彦「軍用動物たちの戦争史」63～65頁。
 - 49 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 インパール作戦』、153頁。

- 50 同上、126頁。
- 51 これらの資料で共通しているのは、日本軍が果敢に迂回や包囲により敵の後方に進出することで、敵である英印軍が守備を諦め後退していくということである。例えば、以下の資料を参照。第25軍司令部『馬來作戰「ジットラ」付近戦闘経過概要』（防衛研究所戦史研究センター所蔵）、1942年、10頁。第25軍司令部『馬來作戰「バクリ」「パリットスロン」付近戦闘経過概要』（防衛研究所戦史研究センター所蔵）、1942年、10～11頁。第55連隊長 陸軍大佐 木庭大『第18師団第55連隊馬來作戰日誌』（防衛研究所戦史研究センター所蔵）、1958年、21～29頁。
- 52 ジョン・フェリス「われわれ自身が選んだ戦場」『日英交流史：1600-2000 3』（東京大学出版会、2001年）、211頁。
- 53 富集団司令部『馬來作戰回顧録（印度軍第11師団長 キー少将記）』（防衛研究所戦史研究センター所蔵）、1942年、16頁。
- 54 南方軍復員本部復員課『第18師団戦史資料』（防衛研究所戦史研究センター所蔵）、連番1025～1030頁。
- 55 飯田祥二郎『ビルマ戡定作戰 上巻』連番2079～2080頁。
- 56 例えば、第18師団の第114連隊長であった小久久大佐は「(ガットヘット (Gathet) の戦闘において) 敵は砲兵と戦車を戦闘に加入せしめ、真面目の抵抗を為したるも、我追撃隊の猛攻と迂回戦法により退却するの余儀なきに至り北方に退却せり」と述べている。小久久『第18師団歩兵第114連隊 ビルマ作戰記録』（防衛研究所戦史研究センター所蔵）、1942年、14頁。
- 57 横山明『第18師団参謀長 横山明大佐従軍日誌』（防衛研究所戦史研究センター所蔵）、連番1422頁。
- 58 『丸』第211号、1964年12月、47頁。
- 59 大本営陸軍部『緬甸方面作戰（討伐）ニ基ク教訓』（防衛研究所戦史研究センター所蔵）、1943年、連番530～531頁。
- 60 後勝『後勝少佐回想録』（防衛研究所戦史研究センター所蔵）、連番1441頁。
- 61 ダニエル・カーネマン著、村井章子訳『ファスト&スロー 上』（早川書房、2014年）、241～242頁。
- 62 藤原岩市『留魂録』、208頁。
- 63 ダニエル・カーネマン著、村井章子訳『ファスト&スロー 下』（早川書房、2014年）、330頁。

防衛大学校紀要（人文科学分冊）投稿規定

平成25年11月29日

改正 令和元年6月10日

防 衛 大 学 校

人文・社会科学紀要編集委員会

防衛大学校紀要人文科学分冊投稿規定

1. 投稿資格

投稿者は下記の者とする。ただし、共著者として下記以外の者を含めることができる。

- (1) 本校の現職の教授、准教授、講師、助教、非常勤講師（以下、教官と総称する）
- (2) 本校名誉教授
- (3) 退職又は転出後2年以内に、在職中の研究成果を発表しようとする本校の元教官

2. 原稿の内容

未公刊の原稿に限る。未公刊であっても、他誌に掲載予定又は投稿中の原稿は、受け付けない。ただし、プロシーディングス等に掲載された口頭発表の要旨、要約の類に相応の修正、発展を加えた原稿は、その旨明記してあれば審査の対象となり得る。

3. 原稿の種別

原稿は、学術論文、資料及び特別研究報告に種別する。

- (1) 論文：独創性が認められる学術的研究
- (2) 資料：学術的研究及び教育の基礎となる調査報告
- (3) 特別研究報告：特別研究を行った教官の報告で、編集委員会が依頼する。

4. 執筆要領

別に定める執筆要領に従う。

5. 投稿の手順および原稿の審査

- (1) 投稿者は原稿を、別に定める執筆要領に従って人文社会科学紀要編集委員会（以下、編集委員会）に提出する。
- (2) 投稿者は所属学科（教育室）の編集委員を原稿提出の窓口とする。
- (3) 提出された原稿は、人文社会科学紀要編集委員長が学科（教育室）長を通じて依頼する1名以上の査読者によって審査される。但し特別研究報告

については査読を行わない。

- (4) 編集委員会は、各編集委員から査読結果報告を受け、投稿された原稿の最終的な採否を決める。
- (5) 原稿は随時受け付ける。5月及び10月の各編集委員会で採択された論文、資料及び特別研究報告は、原則としてそれぞれ9月及び3月の発行予定の輯に掲載される。

6. 著作権等

論文、資料及び特別研究報告の複製権及び公衆送信権は、原則として防衛大学校に帰属するものとする。著作権者が著作権の帰属先を明記した上で、自分の論文、資料及び特別研究報告の全文又は一部を複製、電子化、翻訳することは差し支えない。

紀要に載せられた論文、資料、特別研究報告の全文は防衛大学校学術情報リポジトリに登録されるが、著作権は著作権者の元に留保される。

リポジトリでの登録・公開あるいは利用によって生じた損害・不利益について、防衛大学校は一切の責任を負わない。

投稿者はリポジトリの登録に係る登録者となり、その責務は以下の通りとする。

- (1) 登録された学術情報等の内容は、登録者が責任を負うものとする。
- (2) 登録された学術情報に関し係争が生じた場合、登録者が誠実に解決するものとする。
- (3) 著作権が複数の者に帰属する場合は登録者は共著者からの登録利用許諾書を提出しなければならない。

7. その他

- (1) 当該年度に定年退官する教官の抄歴、写真、研究実績等の掲載については、所属先の学科（教育室）の編集委員が退官者本人の意向を確認し、編集委員長に報告するものとする。
- (2) 別刷りは防衛大学校による紀要の印刷・製本契約の枠内で作成し、投稿者に配布する。ただし、投稿1件あたり30部を上限とする。

8. 附則

- (1) 防衛大学校紀要（人文科学・社会科学編）投稿規定（平成24年6月5日）は廃止する。
- (2) 本規定は、平成25年11月29日から適用する。
- (3) 本規定は、令和元年6月10日から適用する。